

博多人形製造業に関する産業史的考察(1)

——古博多土人形から新興博多人形へ——

高 向 嘉 昭

1. はじめに

伝統的工芸品産業振興協会が平成7年2月、全国の20歳以上の人々に対し実施した「伝統的工芸品に関する消費者意識調査——伝統的工芸品知名度調査——」で、回答者1,262人のうち93.8%が福岡の博多人形を挙げ、博多人形は全国一の知名度を有していることが明らかとなった。第2位は京都の西陣織と、石川県の輪島塗が同率の91.4%で、また第4位以下は九谷焼(石川, 87.8%), 加賀友禅(同, 85.5%), 伊万里・有田焼(佐賀, 84.3%), 美濃焼(岐阜, 82.0%), 信楽焼(滋賀, 79.4%), 京人形(京都, 77.4%), 京友禅(同, 77.1%)の順となっている。

この全国一の知名度は、前々回(平成元年度)と前回(平成2年度)の調査でも、やはり第1位(93.4%)あるいは第2位(90.1%)を占めていたことを考え合わせると、偶然的、一時的知名度ではないことが知られる。

しかし、こうした抜群の知名度を誇る博多人形ではあるが、それらに関する文献や資料は筆者の知る限り意外と少ない。人形一般に関する著書(美術関係を含む)や郷土誌関係の図書などにおいて概説的な記述はいくらか目につくものの、博多人形そのものとしてのまとまった著書、あるいは学術論文といった類のものは、他の伝統的工芸品産業、たとえば各地の織物

業や陶磁器，あるいは漆器，家具など，また，同じ福岡県の伝統産業である博多織や久留米絣，小石原焼などに比べても格段に少ないというのが現状である。中でも筆者がこれから試みようとする産業史的視点からの研究は皆無といってよい¹⁾。

そうしたことを踏まえ，本稿では既存の僅かな文献資料に基づきながら，博多人形の産業化過程と明治中期以降に顕著であった品質・機能の転換(別の表現をすれば「古博多土人形」から「新興博多人形」へ)ということを中心に，若干の考察を加えてみることにした。

2. 博多人形製造の歴史

(1) 博多人形の定義

本論に入る前に，まず，博多人形の定義を明らかにしておきたい。博多人形商工業協同組合では博多人形を「博多の特産品であって，博多近郊の粘土を原料とし，人物を彫塑して素焼になしたるものに，泥絵具等で着色したもの。芸術の香気高く優美にして繊細，典雅なる美術工芸品」と定義している。従って博多人形とは博多で産出される素焼きの彩色土人形ということになる。

(2) 起源

以上の概念で規定される博多人形の起源と系譜については，昭和7年佐々木滋寛氏が『旅と伝説』（岩崎美術社刊）に寄せられた「博多人形の胎生」，あるいは著者不詳の『博多人形沿革史』²⁾に，かなり詳しく記述されている。そこで，これらを参考にしながら博多人形の起源を見てみると次の三つの説が有力なものとして掲げることができる。

①正木宗七説

その第1は「正木宗七説」である。

慶長5年(1600)10月、黒田長政が豊前中津から筑前国に移封され、翌6年福岡城構築の土木工事を起こしたとき、旧領地から長政に従って入国した瓦師の正木一族などが城瓦の製造に従事した。この時の瓦師正木仁右衛門の孫宗七が鬼瓦の細工物から製陶の技法を習得した後、末子の故をもって本家から独立し、製陶業を開くようになった。宗七は甚だ器用人で、初め種々の作品を造ったが、特に大黒面、能楽面の製作に秀で、ついに藩公黒田家の御用焼物師となり細工物の調進を命ぜられるに至った。こうして世にいう「宗七焼」が誕生し、その後二代、三代とその製法が受け継がれ、六代に及んで精巧な土偶を見るようになったところから、この正木宗七が博多人形の源流とされるのである³⁾。

②中ノ子吉兵衛説

上掲の正木氏とは別に、文政(1818～)年間、正木家の第4代宗七幸弘と同じ博多祇園町に住み、幸弘と親交のあった七輪屋中ノ子吉兵衛が当時素人ながら木偶彫刻の達人として令名高き市小路町の牧牛軒中村利治に師事して人形原形の製法に必要な彫塑の技を修め、その後良質の粘土を得、それを基に工夫研鑽の末創り出した土俗素焼人形が、博多人形の原形をなしたというのが第2の中ノ子吉兵衛説である。博多人形の特色が「素焼人形」であるところから、この説が唱えられるようになった。

③小堀善左衛門説

第3は小堀善左衛門説である。善左衛門は京都の木偶師で、永享9年(1437)4月博多に招かれて山笠⁴⁾の人形を作ったが、江戸初期に飾り山笠が登場した時、それらの人形は博多人形師によって作成されるようになり、一年に一度の人形師の腕の見せどころとなっていた。博多人形はこうした

細工物人形の影響も受けていると言われ、それがこの説の根拠となっている⁵⁾。

以上のように博多人形の起源については異なった3説がみられるが、このうちの小堀善左衛門説は博多人形の直系とは言い難く、源流から除外した方がよさそうである。というのは『博多人形沿革史』にも記載されているように「小堀流山笠人形並びにその細工技術は、正木宗七の興した宗七焼人形および中ノ子吉兵衛が創始した土物の土俗玩具人形よりもその移入伝来の歴史は遥かに古く、宗七焼人形、吉兵衛の玩具人形は共に陶土と粘土を原料とした一つは焼物陶芸作品、一つは素焼物泥人形であるのに反し、細工人形は木偶を主体とし原材料は軽木材及び竹材、藁等を使用し、之に衣裳を着けるものであって、其の性質も製作方法も全く異なり、別個の系列をなすもの」⁶⁾だからである。

もっとも、中ノ子吉兵衛の創始した素焼博多人形は、小堀流の衣装人形(細工物人形)とも交流してその影響を取り入れ発達したのは事実であるが、ともあれ、こうして小堀説を除外し、残りの2説を博多人形の起源説とした場合、これらには、さらに次のような接続説を加えることができる。すなわち正木宗七を源流としながらも、中ノ子吉兵衛に博多人形の母型を求める、というものである。

④接続説

中ノ子吉兵衛の4代前の祖先に中ノ子長右衛門なるものがいた。この長右衛門は須崎町で医業を生業としていたが、生来甚だ技工を好み、常に祇園町を往来するごとに正木宗七の製陶業に親しみを覚え、ついに志を転じて祇園町に移り住み、製陶の技を修めて自ら製陶業を開き陶師長右衛門と称せられるに至った。その後約100年、二代、三代の長右衛門を経て宝暦6年(1756)中ノ子安兵衛が出て製陶業を継いだ⁷⁾。その子が吉兵衛である。

この吉兵衛が、すでに述べたように4代正木宗七との親交を通じて人形製作に従事するようになった。従って、当然のことながら、その当初においては宗七焼の流れを汲んだ筈であり、その宗七焼に工夫改良を加えて素焼きの人形を生み出すに至ったのだから、正木宗七を源流とし、母型を中ノ子吉兵衛に求める、というのである。

筆者もこの説が妥当ではないかと考えている。

3. 博多人形製造業の産業化

(1) 産業としての萌芽と定着

以上のような源流を持つ博多人形が、何時の頃から産業として成立し産地展開をしていったのか、次にその問題について考察を加えてみることにしよう。

ところで、産業とは一体何か、ということを確認しておく必要がある。というのは産業の定義については現在のところ、必ずしも統一したものがあるわけではなく、論者によって広狭区々に解釈され、使用されているからである。そこで、筆者は産業を「同一の商品、ないしそれと著しく類似する商品を製作、供給する企業集団」と、一応本稿では定義しておいて、以下の論述を進めていくことにする。

さて、ある産業が、一定の地域に一定の集積を持つ産地として成立するに至った時期を確定するには、その産業の3大指標、すなわち企業数、従業者数、年間生産額等の推移によってこれらを見るのが最適であると思われるが、残念ながら博多人形においては、昭和40年代以前における統計的資料は極めて乏しい。博多人形商工業協同組合に問い合わせせてみても、殆どわからないのが実情である。一つは福岡市域の大部分が今次の大戦で焦

土と化したこと，またもう一つは組合の住所移転などで纏まった資料が消失・散逸したことによるものである。そこで，筆者が部分的にこうした記録の残っている他の文献資料等を探査し，それらを基に虫食い状態ながらも纏めたものが第1表である（ただし，本稿では紙数の制約もあって，明治期のみの分を掲げることにする）。甚だしく空白部分が多いが今はこの程度にしか判明していない。今後とも，さらなる探査を続けて，より完全な

第1表 博多人形の生産数量等（明治元年～明治45年）

年 度	生産戸数	従業員数	生産本数(個)	生産金額(円)	備 考
明治元～					
4年	—	—	—	—	—
5	26	—	100,082,600	4,547.6	福岡県地理全誌
6～10	—	—	—	—	—
11	—	—	56,500	4,568.6	筑前国福岡区地誌
12～14	—	—	—	—	—
15	—	—	187,070	2,305.7	福岡県統計書
16～26	—	—	—	—	—
27	—	—	10,134	3,545	福岡市史第1巻
28	—	—	11,114	3,890	〃
29	—	—	12,032	4,211	〃
30	—	—	13,000	4,540	〃
31	—	—	11,863	4,152	〃
32	—	—	—	—	—
33	20	56	288,000	8,640	福岡市史第1巻
34	20	65	292,000	13,000	〃
35	20	65	297,000	13,500	〃
36	21	65	301,000	13,600	〃
37	20	61	302,000	15,000	〃
38	—	—	—	—	—
39	—	—	—	27,000	福岡市史第1巻
40	—	—	—	29,440	〃
41	45	300	380,000	34,200	〃
42	40	—	382,300	34,890	福岡市案内記
43～45	—	—	—	—	—

備考：—印は不明を表す。

ものに近づけたいと考えている。

さて、このように依拠すべき計数的資料が不足していれば、産業化過程についての考察は他の資料（もしくは史料）などを参照しながら、推察によって補う他はない。

まず藩政時代はどうであったろうか。

『養生訓』で名高い、かの貝原益軒（1630～1714）が、藩命を受けて元禄元年（1688）から16年の年月をかけて編纂したといわれる『筑前国続風土記』のなかで「博多に瓦町とて、瓦工の集り住る町一坊あり。屋瓦及もろもろの瓦器を作る。」と正木家などが職種とする瓦の製造についての記述はなされているが、人形については触れられていない⁸⁾。博多人形源流の一つに数えられている宗七焼の創始者・初代正木宗七が明和3年（1766）に没している（生年は不詳だが、かりに70年間生存していたとしたら1696年ということになる）ところから、年代的にみて、これは当然のことであろう。

この『筑前国続風土記』を基にその後、加藤三太夫一純（享保6年～寛政5年=1721～1793）が鷹取周成の助力を得て天明3年（1783）から天明8年（1788）にかけて編纂した『筑前国続風土記附録』の中に「博多瓦町・祇園町邊に、瓦器を製する家六七戸あり。火鉢・火ちりん・手爐等數品を製す。就中宗七と云者良工なり。京都深草の製にも勝れりと云。近き比に至りて其業ますます精巧にして、諸の玩器を焼出す。高貴の人愛賞して、席上の珍とするに至る。故に遠國にも販き賣れり。」⁹⁾との記述がある。従ってこの頃には、すでに宗七焼の人形が福岡藩領内はもちろんのこと、他国でも売られていたことが知られる。しかし、これらの人形はあくまでも陶業の余技としての人形であって、中ノ子吉兵衛の製作したものとは大きく違っていた。その間の事情を『博多人形沿革史』では次のように述べている。「博多玩具人形は其の始祖と宗七焼宗家との関連によって因由浅からず

と云っても、両系の間には判然たる区別が存する。即ち歴代宗七の製陶技法は吉兵衛の玩具人形とは、製法、性格を全く異にし、宗七焼の各種の風炉、仏像、人形、その他禽獸類等に至るまで夫等の形象を写す作品は、陶工として単に製陶の題材として選んだに過ぎなく、之に反し吉兵衛の作った人形は当初から土俗玩具としての限界を示している。更に宗七の焼物人形類は藩公の御用焼物であり、高祿の武家や富裕階級の贈遺用品として甚だ高踏的な貴族趣味の産物であるに反し、吉兵衛の玩具人形は頗る大衆的、通俗的な特色を持したことも当然である。』¹⁰⁾と。

ところで、中ノ子吉兵衛が生まれたのは寛政9年(1797)であるから『筑前国続風土記附録』の編纂されたころ、当然のことながら、かれの製品はまだこの世に姿を現してはいなかった。博多人形が素焼きの土人形として専門化し、産業として定着していくのはその後暫くの間を待たなければならなかったのである。

中ノ子吉兵衛の活躍した当時の計数的記録がないので確かなことは言えないが、この時期が文化・文政のいわゆる江戸期における爛熟の年代であるところから、吉兵衛およびその子の吉三郎やその他の後継者たちの作った人形が幕末までの間、かなり多量に生産され、売れ行きも良く繁盛した¹¹⁾ことは容易に想像できる。こうして博多人形(=博多土人形)は江戸時代、それも幕末のころではあるが、すでに一つの独立した産業として成立し定着していたものと思われる。

(2) 明治期における展開

しかし、こうして産地形成を見た博多人形も、江戸期から明治維新を経て明治時代に入ると“暫くの間衰微沈滞を続けた”というのが今日では通説となっている。例えば前掲の『博多人形沿革史』には「明治維新は急激な世変をもたらし、人心も暫く安定を失った結果、美術工芸等に対する関

心も稀薄となり、博多の人形も吉三郎によって大いに改良を遂げ同業者も増加したに拘らず需要の伸び悩みから来る萎微沈滞は免れず、不況と苦難は明治18年頃まで続いた。」(同書24ページ)とあり、また、おそらく上掲書を底本にしたと思われる梅林新市著の『稿本古博多人形史』や、その『稿本古博多人形史』を参考にして書かれている安立孔氏の「九州の土人形」(『日本の土人形』所載)の中にも同様な記述が見られる¹²⁾。

なぜ、このような衰微を見せたのか。それについて佐藤ひさし氏は、慶応4年(1868)に明治政府が神道を国教と定め、宗教政策による人心統一を図るために行った神仏分離令が、仏教をはじめとする種々の民間信仰を排斥し、そうした性格を多分に内包している土人形の需要を壊滅的減退に追いやってしまったとされている¹³⁾。

しかし、果たして神仏分離令や明治維新後の騒然たる社会が博多土人形

第2表 明治初期における博多人形の町別生産状況

単位：個，円

町名	生産個数	製造者	金額
早良郡荒戸	大小 1,500	山本与三太	25
瓦町	24,000	藤村清三, 山崎新助	600
下土居町	4,500	的野次平	50.8
上新川端町・下新川端町・川端町	1億	7戸製	800
橋口町	1,500	西村次六	11.8
上須崎町・中須崎町 上鯛町・下鯛町	10,800	4戸製	600
下祇園町	4,200	中子長四郎	160
御供所町	大中小 3,600	中村宗次	200
上桶屋町・下桶屋町 上小山町・下小山町	大中小 16,200	3戸製	900
下厨子町・若竹町	7,300	瀬戸惣助, 柳沢源三	600
中堅町	3,600	高橋清右衛門	300
呉服町・市小路	5,400	2戸	300
総計	100,082,600	26戸	4,547.6

資料：福岡県編『福岡県地理全誌』(明治10年刊行)より作成

を壊滅的狀態に追いやってしまったのであろうか。他産地の土人形では、あるいはそうした現象がみられたかも知れないが、博多人形の場合、明治5年ごろの調査と推定される前ページ第2表の如き生産数量と金額から見る限り、筆者にはなお疑問の残るところである。

ところで、上掲表の中で上新川端町・下新川端町・川端町において1億個のものが生産されているが、もしこの数字に誤りがないとすれば（それも多分に、非常に数が多いという目分量的な意味での1億で、実際に数えたわけではなかろうが）これは恐らく明治初期から生産が始められたのではないかと推察されている泥面子の数量が大きく関わっているものと思われる。泥面子とは遊び道具のいわゆる「おはじき」¹⁴⁾のことで、博多泥面子は落雁そっくりの白地を特色とし、それに、時によっていろいろな彩色が施され、表面の浮き彫り部分も花、魚、紋章、提灯、人物など多種多様なものがあつたということである¹⁵⁾。

この泥面子の部分を除いてもなお筆者には、生産数量や生産金額を見る限り、博多人形業界が壊滅状態だったとは言い難いように思われる。

その考えを補強するものとして、これより少し年代の下がった明治11年度の産出分として三原恕平編『筑前国福岡地区誌』に

上小山町	5,280個	132円
下小山町	3,250個	97円50銭
万行寺前町	7,000個	1,960円
下新川端町	30,000個	300円
今熊町	3,970個	119円10銭
下祇園町	7,000個	1,960円
合計	56,500個	4,568円60銭

との記録があるし、また、明治15年においても『福岡県統計書』の中に187,070個、2,305円70銭の生産状況が記載されている。

たしかに後代の生産量や生産額からすれば、これらの数量・金額は微々たるものであったかも知れないが、江戸時代におけるこの種の統計がないためそれとの比較ができず、確定的なことはいえないが、上掲の生産記録は、生産が回復したといわれる明治20年代以降の数値と比べてもなお見劣りがせず、巷間で伝えられているような“急激な衰微”があったとはどうしても思えないのである。

もっとも上記の数字はあくまでも生産者側からの数値であって需要量自体を示すものではない。しかし、需要の減退があれば、遠からずそれは生産に反映してくるもので、この点からも衰微説に俄に同調することはできないのである。筆者は一時的に若干の変動はあったかも知れないが、さほどの急激な落ち込みはなく、同程度の生産が持続されたものと考えている。もしこの考え方が正しいとすれば、その理由は何か、については未だ纏まったものを提出することはできない。今後の課題としたい。

(3) 古博多土人形から博多人形へ

ところで、今日の博多人形は当初から「博多人形」と称されていたわけではなく、最初は「博多土人形」（あるいは「博多素焼人形」）と呼ばれ、またその「博多土人形」も、博多人形と改称されるようになって後なお、一部において制作が続けられているので、正確には「古博多土人形」として区別すべきである、というのが今日一般的な考え方となっている。

このように博多土人形から博多人形（本稿の冒頭部分で述べたように、従来の博多土人形に対して「新興博多人形」と呼ばれることもある）へと呼称が変換してきたのはいつのころからであろうか。それは単に呼称の変化だけでなく、本質的な機能の変化や品質の変化、あるいは用途の変化などとも関連しているので次にこの点について若干の論考を加えてみたい。

明治41年8月22日付九州日報に「同年（明治23年…筆者注）名古屋に於

て開催せられた第三回勸業博覧会に出品してより頓に其の名が揚がり以て全国に知られるに至ったのである。そうして其の前に於ては今日のやうに博多人形と言わずして、只土人形と云つてゐたが、其の年万年行寺前町讃井清兵衛、川端町後藤次吉の両人が博多人形と云ふ名称を以て右の博覧会に出品し、賞状を貰ふと共に、土人形と云つて居つたのを初めて改称し、博多と云ふ文字を冠して博多人形と云ふやうになつたのである。』¹⁶⁾と報じている。ただし、この文中で「名古屋に於て開催せられた…」と記述されている文言は明らかな誤りである。

博多素焼人形と呼ばれていたものから「素焼」の2文字が取れ、単に博多人形となつたのは、いくつかの資料に照らし合わせてみると、それは明治23年東京で開催された第三回内国勸業博覧会からということになる。いくつかの資料に照らし合わせて、というのには次のような理由がある。些か瑣末にこだわり、重箱の底をつつく感なきにしもあらずであるが、この「明治23年東京での第三回内国勸業博覧会」と記述されるべきところが諸書によって実に区々である。たとえば上で引用した九州日報もそうであるが、その他にも「明治23年第二回大阪での勸業博覧会」となっていたり、あるいは「明治中期大阪博覧会」などと記述されている。いま、それらを理解しやすく整理し表にしてみると第3表のように実にさまざまな内容をそこに見ることができる。

第3表 「博多人形」改称についての博覧会等に関する諸書の記述

開催年	回	開催場所	博覧会名	記載図書ないし論文名
明治23年	2	記載なし	内国博覧会	『日本の土人形』
23	2	大 阪	内国（もしくは 勸業）博覧会	『博多人形沿革史』 『博多人形一品作作品集』 『福岡市の史話と観光』 『九州の伝統的工芸品』 『稿本古博多人形史』 『福岡県百科事典（下）』 協同組合編『博多人形の沿革』 姫城睦男「博多人形に対する商品 評価調査」 『日本人形玩具辞典』 その他
23	記載なし	大 阪	勸業博覧会	『伝統工芸品銘鑑』
23	記載なし	記載なし	内国勸業博覧会	『全国郷土人形図鑑』 『日本の土人形』
23	3	東 京	内国勸業博覧会	『福岡市誌』 『組合のしおり』 『博多風土記』
23	3	大 阪		『郷土玩具辞典』 『人形と共に六十五年——小島与 市伝』
23	3	記載なし	内国（勸業）博 覧会	『福岡市史第一巻』 渦原実男「地場産業のマーケティ ング戦略と振興策」
23	3	名古屋	勸業博覧会	明治41.8.22 「九州日報」
36	5	大 阪	内国勸業博覧会	『福岡市史第六巻』 『福岡県の近代工芸』
明治中期	記載なし	大 阪	博覧会	佐々木滋寛「博多人形の胎生」 『日本の伝統的工芸産業』

そもそも内国勸業博覧会は明治政府が殖産興業政策の一環として、全国各地から代表的物産・技術を一堂に集めて陳列し、産業技術の発達・普及、製品の品質向上、輸出の振興などに役立てようとしたもの¹⁷⁾で、明治10年東

京上野公園での第1回を皮切りに、以後第5回まで政府主催で開催された。その開催地および開催年は次のとおりである。

第1回	東京	明治10年
第2回	東京	14年
第3回	東京	23年
第4回	京都	28年
第5回	大阪	36年

博多人形がこの内国勸業博覧会で褒状を貰ったのは、すでに述べたように明治23年第3回でのことであった。この年の翌年、すなわち明治24年に編纂発行された『福岡市誌』に、次ページ第4表のとおり記録がある。

従って、これから見る限り第2回としたもの、および第3回としていても開催地を大阪あるいは名古屋としたものはいずれも誤りといわざるをえない。

他の記述の中には第1回あるいは第2回に出品したものがあるとしているが、これらは出品はしたものの褒状を受けるまでには至っていない。また、明治36年の第5回勸業博覧会にも出品されているようであるが、このときは最初から「博多人形」として出品され、すでに素焼の言葉はとれていたと推察される。

こうした諸書によって区々であるのは¹⁸⁾、恐らく次のような事情に基づくものであろう。それは、何人かが、それもその道の権威者といわれる人が、記憶違いや思い込みによって、発言・記述したことが、次の人によって、最初の発言・記述が権威者によってなされていればいるだけ、それが正しいものと無条件・無批判的に受容され、誤謬であるにかかわらず、何時の間にか事実として擦り替わり、定着していったものであろう。歴史的事象は必ず原典や原資料に依拠すべきことは、いまさら言うまでもないこ

第4表 内国勲業博覧会の受賞者

第三回 明治廿三年										第二回 明治十四年			第一回 明治十年				
塗板	農具	薄茶	人形	靴	織物	屏風	?織	段毛通織	晒蠟	博多織	全	全	筆	全	博多織	博多絞	品目
全	全	全	褒状	全	全	全	三等有功賞	全	二等有功賞	全	全	全	褒状	全	全	花紋賞牌	種賞 類品
一 人	三 人	三 人	二 人	福博製靴會社	紳恒太郎	全 人	裕居元右エ門	岡松国太郎	和田精一	岡松興八	杢村惣七	松村惣三	河原田平助	永末茂平	白水長左エ門	永末清次他七名	姓 名
靴	葛素麵	馬具	石炭	全	全	全	全	博多織	繭	全	全	全	博多織	筆	鋤	博多織	品目
全	全	全	褒状	全	全	全	全	全	三等有功賞	全	全	全	全	全	褒状	花紋賞牌	種賞 類品
一 人	一 人	一 人	一 人	中西源太郎	岡松興八	社家間甚助	安武榮次郎	越智通人	藤崎強太郎	柴田興右エ門	服部太三郎	鶴田總助	富川卓爾	河原田平助	磯野七平	林徳兵衛	姓 名
◎	鋏	筆	絹織	木綿織	博多織	生糸	全	博多絞	博多織	全	鋤	算盤	靴	革	利器	庖刀	品目
◎	全	全	褒状	全	全	全	褒状	全	三等有功賞	全	全	全	全	全	全	褒状	種賞 類品
◎	二 人	一 人	一 人	一 人	二十一人	二 人	六 人	横大路幾太郎	安河内弥三	深見平次郎	磯野七平	青柳平三郎	太田勝米	山岸又右エ門	尤九三郎	信國羊三郎	姓 名

資料：福岡市役所編纂『福岡市誌』積善館，明治24年，第39，40葉

(注) 明治廿三年第三回の品目中「?織」とあるのは，原本の印刷不良によって?の部分
が判読できないことによる。

とであるが、原典や原資料の所在不明、または時間の制約など諸々の都合で、それを疎かにした結果がこうした謬見・謬説となって現れたものと思われる。筆者も度々この種の過ちを犯しているの、原資料による再確認の必要性をこの一事からも改めて痛感する次第である。

なお「博多人形」の名称が一般的に使用されるようになったのは、上述のとおり明治23年からであるが、江戸時代に「博多人形」の名前が全くなかったかというところでもなさそうである。例えば、筑前国の4代藩主黒田綱政は宝永5年(1708)に高取焼窯東山御陶所(現在の早良区西新五丁目)を設置し、高取重方が城代組頭となりこれを管理し、その子英寿、孫英業と相続したが、その英業(天保4年=1833、6月死去)が書き遺した書類のなかに

博多人形顔つや付方

- 一、上等松印こふん(胡粉=筆者注)
- 一、水貳合入
- 一、上さらしにかわ(晒膠=筆者注)掛目五匁
 - はけにてよくよくぬるべし
 - 上さらしぬのにてやわらか
 - に能〓こするへし

と「博多人形」の文字が記されており、英業の生存した18世紀から19世紀ごろには、すでに博多人形の名称が部分的にはあったとしても、使用されていたことはこれから見ても明らかである¹⁹⁾。それは当事者の間では出来る限り簡明な名称が使用され、慣用化するのが通常であるから、他に区別すべき人形の種類がない場合、ことさら博多土人形あるいは博多素焼人形といわずとも、博多人形で充分に通用したからであろう。もちろん、一般的には博多土人形ないし博多素焼人形の名称が使用されたことまで否定

するつもりはない。

(4) 「土俗人形」から「工芸的人形」への質的転換

明治23年以降、博多土人形（ないし博多素焼人形）から博多人形へと転換していったことは上述のとおりであるが、この博多人形が、時によって「新興博多人形」と呼ばれることもあるのは、この時期を境に品質や機能が大きく変化していったことの端的な表れといえよう。

「再び平穩を取り戻した明治二十年頃には、文明開化の洗礼をうけた大衆の趣向は、すでに大きく変わっていて、古博多土人形は、過去のものとして一般の大衆にはもう迎えられなくなってしまっていたのである。」²⁰⁾というように大衆の求めるものが、それまでの素朴ではあるが、洗練という点でいささか不足するきらいのある土俗人形から美術的要素を含む鑑賞用・装飾用の工芸的人形へと変化し、当然産業としても、こうした一般大衆の要望に適合するようなものの制作が迫られることになったのである。またそのための研究と努力が払われたことはいうまでもない。

「…この間同業者においては時勢の進歩に鑑み、製造上にも種々の工夫を凝らし、ことに福岡市出身の彫刻家山崎朝雲、洋画家矢田一嘯等の指導を受けて生新なる意匠と美術的思想とをもって専ら高尚優雅な製品を産出し、努めて内外人の嗜好に適應せしめることに注意したため、業務も著しく発達を遂げるに至り」²¹⁾とあるように、他の産地はいざ知らず、博多人形産地では多くの近代芸術の手法や考え方を人形制作に取り入れ、それまでの玩弄品から鑑賞用、装飾品としてのものへと一大転換を図っていったのである。さらに、大正時代になってからではあるが、それまでの大まかな人形ではなく、より写実性を高めようと九州大学医学部の解剖学研究室で人体解剖学の講義を受け、それを人形制作に応用する者も現れてくるなど、製品の品質や機能の向上に向けて並々ならぬ努力が払われたこともそうし

た転換を一層決定づけることになった。

こうした写実性への志向は、例えば武者物制作の場合などでは武具等の考証にも念を入れ、また動物を作るときは動物園に出向いて写生に励む、というように人形制作に携わる者の格段の努力によって、今日の博多人形への着実な進展がみられるようになった。

とはいっても「嘘がなければ恰好がつかぬ。」こともあり、とくに美人物では8頭身、10頭身のものが創作されるなど、美的鑑賞に相応しい工夫もなされている²²⁾のを忘れてはならない。

こうして博多人形は、それまでの土俗人形にしばしば見られる型にはまった形態や静的姿態から脱却し、立体的芸術品としての人間的躍動感を取り入れ表現することによって一層その厚みを増していった。また浮世絵・日本画の叙情的美を実現することで日本人の心に深く食い入っていったのである。粘土によって表現される容姿と入念な彩色は、土人形のみでなく、各種の日本人形の中でも最高美を極めた人形となり、その名声は全国はもとより海外にまで広がっていった²³⁾ことは至極当然のことといえよう。

ともあれ、博多人形は、ただの土くれを生きた姿にし、魂を入れることに成功したのである。今日一見して博多人形と他の土人形との差異を認めることができるのは、先人たちによる、こうしたさまざまな努力工夫の、その結晶以外の何物でもない。優位的差別化こそ、産地や企業を発展に導く最高のマーケティング戦略なのである。とはいっても博多人形がこうした造形的な高さだけを目的としていたのではなく、何よりも人々に愛される人形作りを目指したことはいうまでもない。そうでなければ産地としての今後の発展は望めなかつたであろう。

4. おわりに

上述のように、博多人形は江戸時代にその源を発し、産業としての基礎を固めながら、本稿の「古博多土人形」から「博多人形」の項で示したように、明治時代の中期に至って大きく質的・機能的転換を遂げ、それまでの単なる「遊び」としての土俗的人形から鑑賞用・装飾的対象物へと変化していった。当然のことながら、業界ではそうした変化に耐えうるだけの質的向上と研究を着実に積み重ね、明治末期には土人形の極致としての博多人形が完成²⁴⁾し、その名を全国に轟かせることになったのである。産業史的見地からすれば、明治期は博多人形産業界にとって一大画期の時代として位置づけられることになる。

ところで、こうした歴史的経過の結晶である近代の博多人形に対し、その芸術性や伝統性の稀薄化を嘆く人がいないでもない²⁵⁾。たしかに受けとめる人の立場や理念によって、如何ようにも批判はできるし、またそれを拒むものでもない。しかし、そうした批判はあくまでも第三者的視点からのものであって生産者の立場に立ったものではない。いわば外野からの無責任な批判といってよい。すでに述べたように今日の博多人形は歴史的経過の中で、大衆の意向を反映した最大公約数的なものとしてその姿を見せているのであり、恣意的に生まれ出てきたものではない。

今日経済界に蔓延し、まだその衰えを見せていない経済利益偏重主義は勿論排斥されねばならないが、一般生産者にとっては芸術よりも、伝統よりも、まずそれを売って生活を確保し、家計を維持することの方が大事である。どんなに芸術的に優れた立派なものであっても、それが販売市場で売れなければ意味はないのである。消費者が何を求めているか、それは時

代により地域により異なり、また変化するものである。そのような時代の趨勢に従いながら、また、それを先取りしながら生産活動は続けられていく。“大衆に迎合するのは墮落である”というのは、高度な芸術性を指向し、現世に恬淡とした、いわゆる「作家」ならいざ知らず、一般的な生産者（そのようなものの集まりが産地である）にとっては、現実の生活を無視した妄言とでもいうべきものであろう。

注

- 1) かつて福岡市立図書館が博多人形についての資料調査を行い、それらを整理し、一覧表にしたものがあるが、これらは殆どが歴史や工芸関係、あるいは作家伝といった類のものであり、社会経済的視点からの著述は数えるほどでしかない。もっとも、この資料は1984年現在のものであり、それ以後刊行されたもの（あるいはそれ以前に発表されていても、この資料に掲載されていないもの）などを勘案してみても、なお社会経済的労作は全体的にも数が少なく、またそれらも「実態調査報告書」、「振興ビジョン調査報告書」の類、およびそれらを基にしたの論述といったものであり、筆者が本稿で試みる産業史的側面からのものは管見するかぎり皆無である。
- 2) この『博多人形沿革史』そのものには著者名、発行年は明記されていないが、他の資料によれば小田部博美著で昭和29年に博多人形商工業協同組合から発行されたものと推定される。また、「博多人形の胎生」には正木宗七説と中ノ子吉兵衛説の二つしか記載されていない。
- 3) 『博多人形沿革史』10～16ページ、ならびに九州通商産業局監修『九州の伝統的工芸品』九州電力株式会社事業開発部地域振興室、平成7年、11ページ。
- 4) 博多祇園山笠は夏の疫病退散を祈願する祭りであるが、その起源は仁治2年(1241)ごろといわれている。
- 5) 九州通商産業局監修『九州の伝統的工芸品』九州電力株式会社事業開発部地域振興室、平成7年、11ページ。
- 6) 『博多人形沿革史』18ページ。
- 7) 『博多人形沿革史』22ページ。
- 8) 足立孔氏が「九州の土人形」(俵有作編集『日本の土人形』文化出版局、昭53年)の中で「貝原益軒の編纂した大著『筑前続風土記』に「博多瓦町、祇園町に瓦器を製する家数軒あり。(後略)」と記されているが、これは明らかに『筑前国続風土記』

と『筑前国統風土記附録』との混同である。

- 9) 加藤一純・鷹取周成共著，川添昭二校訂，福岡古文書を読む会『筑前国統風土記附録（上巻）』文献出版，昭和52年，111ページ。

なお，この『筑前国統風土記附録』は現在聖福寺本以外にその写本の存在は知られていないとのことであるが，昭和7年『旅と伝説』に掲載された佐々木滋寛氏の「博多人形の胎生」には「博多瓦町祇園町ニ瓦器ヲ製スル家数戸アリ。火鉢，陶爐，手爐，炮輒等数品ヲ製ス。就中近世正木宗七ト言者ノ家ニ製スル處最良製ナリ。京都深草ノ製ニモ勝レリト云フ。近頃ニ至リテハ其業益々精好ニシテ，諸々ノ玩具ヲ焼出ス。愛賞シテ席上ノ珍トスル者多シ。廣ク他邦ニモ販ギ賣レリ。土ハ那珂郡野間諸岡ノ二村ヨリ出ズ。」というように，やや字句の異なったものが記載されている。あるいはその当時他の写本があったのかも知れない。

- 10) 『博多人形沿革史』27～28ページ。

- 11) 足立孔「九州の土人形」（俵有作編集『日本の土人形』文化出版局，昭53年）170ページ。

- 12) 「九州の土人形」では「明治維新から明治十年の西南戦役に至るまでの間の九州の地は，まさに騒然として，人形，玩具どころではなく，土人形の需要も一向に伸びず，不況の苦難の年月は，明治二十年頃まで続いたのである。」と述べ，継続期間が若干伸びているが同様の内容となっている。（俵有作編集『日本の土人形』文化出版局，昭53年，171ページ。）

なお『博多市史第一巻明治編』のなかにも「その名声を世に揚げるやうになったのは明治二十三年以後のことである。其の以前に於ては其の産額も微々たるもので，今日の十が一にも及ばなかつたのである。」と明治41年8月22日付九州日報の記事を掲げている。

- 13) 詳細については佐藤ひさし著「祈りと願いの人形」（俵有作編集『日本の土人形』文化出版局，昭53年）117～119ページを参照されたい。

- 14) この泥面子（土面子とも呼ばれる）は「おはじき」の他，駄菓子 of 景品としても使用されていることが小古井嘉幸著『中野の土人形』の中で述べられている。（『同書』189ページ参照）

- 15) 梅林新市『稿本古博多人形史』郷土玩具研究会，昭和41年，84ページ。

- 16) 『福岡市史（一）』790ページより引用。

- 17) 学習研究社『グランド現代百科事典』1990年改訂新版第8刷，119ページ。

- 18) 同じようなことが，組合の名称にも見られる。すなわち明治28年に結成した博多人形協同組合も，ある書には「博多素焼人形組合」とあり，また他の書では「博多人形同業組合」と表記の仕方が違っている。明治23年以降「博多人形」を公称したのであれば明治28年結成の組合名からも当然「素焼」の文言が取れていなければならないはずであるが，もし「博多素焼人形組合」が事実であったとしたら——果たして「博多素焼人形組合」であったのか，あるいは「博多人形同業組合」であった

のか、その点を筆者は確認していないので——それは何故なのか、疑問の残るところである。些細なことではあるが今後の課題としたい。

- 19) 筑紫 豊「博多人形——制作は江戸時代から」(福岡市長室広報課編集『ふくおか歴史散歩』昭和57年) 118ページ。
- 20) 足立孔「九州の土人形」(俵有作編集『日本の土人形』文化出版局, 昭53年) 171ページ。
- 21) 『福岡市史 (一)』784ページ。
- 22) 渡辺雄二編『人形屋嘉平——博多人形師原田嘉平作品集——』平成6年, 51ページ。
- 23) 海外進出については後日稿を改めて論述することにしたい。
- 24) 『福岡県百科事典 (下巻)』, 西日本新聞社, 昭和57年, 454ページ。
- 25) 例えば福岡県出身の鹿児島寿蔵氏は「土焼の人形で今日の博多人形のように写実的であること, 彩色の精緻巧妙なることなどの良否はともかくとして, 他の人形の及ぶところではない。このように可能なかぎりの技巧に終始している点には, ただただ驚くばかりであるが, 率直に言って精神面の欠如による通俗化は何によってしてもおおうべくもない。(中略)このへんで昔日の正木宗七の作風を思いかえし, あるいは, 古博多人形などを省みてはいかがなものであろうか。そうして真に品格のある人形の出現することを願ってやまないものである。それは世の識見者の異口同音とするところ・・・」と淡交社刊『日本の工芸5 人形』の中で述べられている。